

楽園の花は咲かない

白井 くら

日野、こんな話を知っているか。目の前の男が放ったその言葉に、俺は書類に落としていた視線を上げた。野上という名のそいつは椅子の背もたれに全体重を預けるような格好で、顔を僅かにこちらへ傾けていた。細められた眼には面白そうな色が宿っていて、これは面倒なことになると長年の経験から悟る。

「異性の臭いをいい匂いだと感じたら、その二人は遺伝子的に離れているからカップルとしてベストで、臭いと感じたら遺伝子的に近いらしいぞ」

「へえ、それで？」

「それが本当だとすると、年頃の女の子がよく言う『お父さん臭い』ってのは、至極まっとうな主張なわけだ。遺伝子の半分は同じだからな」

「そうだな」

「人が好きな異性を選ぶときに重要視するのは、外見、性格、その他諸々だが、大概個人の好みに左右される。

つまりは理性で選んでいることになる。反対に臭いかそうでないかの場合は、遺伝子に左右されるから本能の領域だ。嗅覚によるパートナー選択は、遺伝子の多様性とそれによる子孫繁栄を目的とした、人間の動物としての能力ということだ」

野上は長々とした説明口調の言葉を満足げに語り終えたが、まだ油断はできない。こうやって語り終えた後に、いきなり爆弾を落としてくるのが度々あるのだ。今みたいだ。

不意に天井に向いていた彼の顔がこちらを向き、ニンマリと笑った。その笑みに隠し切れない底意地の悪さが見えて、俺は顔を引き攣らせた。

「ところで、昨日振られた彼女さんはどんな『におい』だった？ 臭かったか？ いい匂いだったか？」

「なんで知ってるんだ、お前！」

頭にグアツと血が昇り、勢いに任せて叫んだ。そのことはまだ誰にも言っていないはずなのに、どこからその情報を仕入れたんだ。そう問い詰めたのに動揺しすぎて言葉が出てこない。野上はわざとらしく両耳を指で塞

ぎニヤニヤ笑っていて、腹立たしさにぎり、と奥歯が鳴った。会社なんだから静かにしろよ、と笑みを引つ込め呆れた風を装いはしたが、心の中では腹を抱えて大笑いしているに違いない。

「高い倍率を勝ち抜いてやっとこさ付き合うところまでこぎつけたのに残念だとは思うが、こういうことは切り替えが大切だ。次は自分にとって好ましい匂いの人を選ぶことだ」

そんな説教じみた言葉を皮切りに、野上は匂いがどれだけ人間の心身に影響を与えるのかという持論を語り出したが、正直ほとんど頭に入っていない。真新しい傷を抉られたショックで、淀みなく紡がれる彼の言葉は右から左へすり抜けていく。

今日は一段と長そうだ。彼の演説を止めることを早々に諦め、重い溜息を吐きながら俺は目の前の机に突っ伏した。

* * *

『嗅覚は人間が唯一初めから最高レベルで持っている感覚であり、においはその全てを感じることができると高の外的刺激だ』

野上という男を語るうえで、この言葉は欠かせないと俺は思う。

俺がこれを初めて聞いた時、こいつは住んでいる次元が違う、と思ったことを今でもよく覚えている。

彼を一言で言うならばにおいマニア。においに興奮するらしいからにおいフェチと言った方が正しいかもしれない。

匂いに執着するあまり、自分の手で化学的に作り出してきた時にはもう何も言えなかった。それが食べ物や草木の香りだったらまだ良かったのかもしれないが、体育後の教室の汗と制汗剤の混じった匂いとか、何年も開かれていないような古い本の匂いとかの妙にマニアックな匂いだったから始末に負えない。わざわざ作らなくてもいいだろうと何度思ったことか。

それなのにその趣味が高じて、最終的にはとある有名

香水メーカーに研究者として勤めることになったのだから、人間何が起るか分からない。野上の職場での評判はなかなか良くて、研究熱心で将来有望な若者という人物像が出来上がっているらしい。香りを研究する場所だからか、その嗜好もむしろプラスになるのかもしれない。

だがプライベートで少しでも関わりのある者は、あれは長所になるような甘いものじゃないと口を揃えて言うだろう。おそらく付き合いが長い人ほどその思いは強いはずだ。

ある人は、彼を重度の匂いフェチで変態、と言う。

またある人は、彼のそれはマニアやフェチというレベルではない、もはや信仰だ、と言う。

正直なところ俺も野上の匂いへの執着がマニアやフェチに収まるようなものではないと思っているが、信仰ともまた違うということを知っている。あの異常なまで

の執着は匂いの正体を解き明かしたいという純粹な知的好奇心と、匂いへの絶対的な信頼から生まれたのだ。言葉だけ見ればとてもありきたりで、理系人間のさだとか、孤高の科学者みたいだとか、彼を知らない人はそういった感想になるのだと思う。あの執着に巻き込まれた身としてはふざけるなど言いたいが。

高校から始まった野上との付き合いの中で、奴の突拍子もない行動の被害は数えきれないくらい受けたし、本気で縁を切ろうと思ったことも一度ではない。教師に怒鳴られるのはまだましな方で、下手したら死亡事故になっていたかもしれないことまでやらかしていた。

例えば、硫化水素は本当に腐った卵の臭いがするのかわかると言い出し、実験室に籠った高校二年生の夏。

野上は本当に卵を腐らせ——ご丁寧に腐敗日数の違うものを何個も作ってきた——硫化水素の臭いと比べていた。この時は教師の許可なく勝手に薬品をいじっていたので、しこたま怒られ反省文を書かされた。が、それよりも辛かったのは、猛暑の中臭いが漏れないようにと閉め切られた実験室の中で、腐卵臭の臭ぎ比べを強要

されたことだった。

「思ったほど似てなかったな。日野もそう思うだろ？」

騒動を起こした帰り道、いけしゃあしゃあと聞いてきた奴に殴りかからなかったあの頃の自分を褒めてやりたい。

どうしてそんな男と今なお付き合いがあるのか、自分でも疑問に思うことがある。それでも何だかんだ言いながら、疑念に思うことがある。それでも何だかんだ言いながら、疑念に思うことがある。それでも何だかんだ言いながら、疑念に思うことがある。口が裂けても言えない。

匂いへの執着の元である好奇心と信頼の裏にひどく暗い渴望が隠れていると知った日、自分はきつと野上を見捨てることを諦めてしまったのだ。それが知ってしまった責任感からなのか、単なる同情心からなのかは分からないけれど。

* * *

「日野君、ちょっといいかしら」

残暑もすぎ、やつと過ぎしやすくなってきた頃。ちょうど硫化水素の一件を忘れかけていたときだった。一日を終えて気だるい体をのろのろと起こしてさあ帰ろうと立ち上がった瞬間、担任に呼び止められた。

「今日休んだ野上君にプリント持って行ってあげてほしいの。結構急ぎのものだし、明日は土曜日で渡せないから」

「はあ、分かりました」

野上がいなければわりと優等生だった俺は二つ返事で引き受けた。それにこういうことは今までに何度かあったから、別段断る理由がなかったというのもある。

預かったプリントをかばんに滑り込ませ、さつさと教室を後にする。気だるかった体は何となく軽くなっていた。野上に会うせいかな？ という考えに至って、うげつと心の中で呻く。確かに今日一日調子が出なかったのは事実でも、自分にとつてのトラブルメーカーが恠しいなどとは思いたくない。あいつのせいで何度被害を受けると思ってるんだ、しっかりしろ自分！ そんなことをぐるぐる考えていると、気付けば野上の住むアパートは

目と鼻の先に迫っていた。

ピンポーン

チャイムを鳴らして一分ほど待つとゆつくりとした足音が近付いて来る。そしてその音がドア前で止まり更に十秒ほど待てば、ドアが申し訳程度に薄く開かれ、中から、何しに来たという野上本人のだるそうな声が聞こえてくる。

野上が休むたびに繰り返されるこの一連の流れが今日はなぜか始まらない。チャイムを鳴らして一分経ち、二分経ち、五分経ったところでもう一度チャイムを鳴らした。そこから一、二分おきにチャイムを鳴らすこと十分、明らかにおかしいと思いちよつと強めにドアを叩きながら、野上を呼ぶ。

まさかないのか？ でも中で倒れているかもしれないし……。

どうしたらいいか迷い一旦腕を下ろす。その下ろした手がドアノブに当たって、キイと小さな音を立てながらドアが開いた。鍵が開いているということは中にいると

判断し、恐る恐る中を覗き込んだ。

「野上ー、大丈夫か？」

声を掛けつつ家にあがれば、なんとなく悪いことをしている気分になる。プリントを届けに来たという正当な理由があっても家主の許可なく上がるのはやっぱり気まずい。早く渡して帰ろう、そう思いながら奥の部屋の扉を開けた。

開けた瞬間異様なにおいがして、思わず踏み出しかけた足を止めた。吐く程ではないが、とにかくいろんなにおいが混ざり合っているようだった。部屋の真ん中には野上がいて、座椅子に座って目を閉じていた。

「何しに来た」

いつもと同じセリフを、いつもと同じ調子で言うから、俺はちよつと安心した。

「プリント届けに来た。お前全然出てこないからびっくりしただろ。寝てないなら出てこいよ」

呆れたように言って、プリントを取り出す。野上が動こうとしないからそれを渡すために内心恐る恐る部屋

に足を踏み入れた。野上のすぐそばまで来た時、奴は不意にばかりと目を開けた。その眼にまるで光がないように見えて、知らず知らずのうちに半歩引いた。

「日野、せつかく来たんだ。面白い話をしてやるよ」

ニンマリと笑いながら放ったその言葉を言うやいなや、ガツと俺の腕をつかみ無理やり座らせた。そして再び口を開く。

「安息香酸の由来はそのまま、安息香の成分に安息香酸のエステルが多いからだ。化合物の名前ってのはそれを多く含むものからとることはよくあるが、ベンゼンも安息香の別名であるベンゾインにちなんでいるんだ。なかなか面白い香だろ？」

だとか、

「香水はアルコールに香料を溶かし込んだものなんだが、その混合の比率によって香りがかなり違ってくる。香料といっても遡れば簡単に作れる化学物質なことが多い。だから比率さえわかっしまえば市販の高い香水も自分で調べることができるってことだ」

だとか。野上は匂いにまつわるうんちくを何かに憑り

つかれたように延々と話し続けた。それを止めることもできず、話の内容を半分も理解できないまま俺はただ嵐のような言葉に耐えていた。どうしたんだ、そう聞きたいのに野上の眼は俺が口を開くことを許してくれない。掴まれたままの腕が痛い。背中に冷や汗が伝う。

何があった、お前。

「匂いフェチっていうのはな、実は赤ん坊のころからあるんだってよ。母親の匂いを本能的に求めるんだろうな。おっぱいの匂いに釣られてるっていう可能性もあるが、それも含めて母親の匂いだし間違っちゃいないだろう？ 赤ん坊は本能だろうが、俺みたいにくなくなっても匂いにハアハアしてるような奴は何を基準に求めてるかわかるか？ 他の奴らは知らないが俺の基準なら教えてやるよ」

結構ですと言って、今すぐここから帰りたい。においについて語る野上はいつも異様なテンションだったが、その比じゃない。というか本気で怖い。

「俺は物心がついたときにはもうにおいフェチだったらしくてな、部屋の芳香剤から洗剤、果ては親の化粧品

のにおいにまで口を出してたんだと。ちょっとでも変えると気持ち悪いくらいすぐに気付いて文句言ったり怒ったり、相当扱いづらかったと思うよ」

扱い辛いのは今もだろ、と心の中でツツコンだ。

「でもまあ普通に愛してくれていたし、ごくごく一般的な家庭環境だったとは思ってる」

そこまで言って、野上は俺の腕をやっと解放して立ち上がった。そしてそのまま部屋の奥にある押入れのほうへ向かう。がらりと押入れを開けた瞬間、何かが腐りかけたような嫌な臭いがむわっと漂ってきた。俺はその臭いに眉を寄せたが、野上は押入れの前に立ったままこちらに背を向けていて、どんな顔をしているかわからない。それでさあ、と奴は続けた。

「俺が小学生の時、乗ってた車が事故にあっつてさ。車ごと崖下に落っこちたんだよ。」

俺はさっきまでとは違う意味で動けなくなった。野上の声だけが室内に落ちていく。

「きれいにボンネットを下にして落ちたから運転席の奴は即死で、後ろにいた俺もどつかを切ってたみたいでさ。助けが来るのに時間がかったのもあって、途中で意識が朦朧としてた」

「そうしたら、だんだん楽になっていったんだ。車の中にいたはずなのに凄く広い場所にいるような気もしてた。結構ぼやけて見えてたけど綺麗なところだっていうのも分かった」

「けど一番覚えてるのはにおいなんだ。今まで嗅いだことのないにおいで、いい匂いとか嫌な臭いとかも分らないけど、あの場所でしかかげないってことだけは分かった。だからおれはずっとそこにいたいって思った」

「うんてんせきにいた母さんもいた。きつと。だって車の中とおんなじにおいがしたから。けどおれだけこっちにもどってきちゃった」

「おれはもういちどあのおいをかぎたくてずっとさがしているんだあのおいがするところにかあさんもきつという」

「野上っ！」

それ以上聞いていることができなくて、俺は立ち上がり彼の肩をつかんで強引にこちらを向かせようとした。けれど肩に手を置いた瞬間、その向こうに見えたものにまた凍りついた。

色とりどりの鮮やかな花たちに埋もれるようにして、小動物たちが眠っていた。

それらは明らかに腐臭を発していて、関節がおかしな方向に曲がっているものもいた。目を逸らそうにも逸らせない。上手く息ができず、ひゅつと喉の奥が鳴った。

「い、れ」

「これ？ あのおいにているからひろってきたんだ。はなもあのばしょみたいできれいでしょ？」

俺には理解できないことだらけで頭が破裂しそうだ

った。その一方で、野上のおいへの執着について全てが腑に落ちたようなそんな感覚もある。目の前にある光景に気持ち悪いとかそういう思いはなくて、ただ見つけたかっただけなのかという納得が胸の内を占めていた。そこには自分が野上の追求の枷になることはないという諦めも含んでいて、我ながら悲しくなる。けど多分、俺はお前が行ってしまったら寂しいよ。

お互いに黙ってしまっただけしばらく沈黙が続いた。それでもこれだけは知りたくて、俺は恐る恐る聞いた。

「お前は、あの場所に行きたいのか？」

俺がそう言うと、野上はようやくこちらに振り返った。口角は上がっているくせに何かを堪えるように眉根を寄せて、今にも泣きだしそうな笑みだった。

「わかんない」

そうとだけ言った声は確かに震えていた。

* * *

「……そういうわけで、匂いは絶対の信頼に値するものだ。日野もそろそろ嗅覚と匂いの本当の価値を理解するべきだな」

予想通りいつもの五割増しで長い演説を締めくくった野上は、満足げに息を吐いた。気分が高揚しているのか、頬がかすかに赤い。多分俺が話を完全に聞き流していたことを分かっていないだろう。それどころか顔すら向けていないことにも気付いていないんじゃないだろうか。まあ、それに気付いたところでこいつは何か反応するわけじゃないから、俺も自由になっている。

要は自分が喋りたいだけなのだ、この男は。己の信念を主張するだけして人に押し付けようとはしない。もちろん信念を批判する奴には徹底的に反撃するが。俺に理解するべきだと言っておきながら、心の中ではその価値を理解してほしいとはこれっぽっちも思っていないのだ。

机に突っ伏したまま、ぼんやりととりとめのないことを考えていたら、いつの間に近付いてきたのか、俺の正面に野上が立っていた。

「就業時間中に不貞寝とは、いい身分だな。ごつい男がそんなことしても気持ち悪いだけだぞ」

就業時間中に演説ぶちかますのはどうなんだ。喉元まで出かかったその言葉を飲み込み黙って顔を上げる。下手に口答えすれば十倍になって返ってくるのが分かっているからだ。

見上げた先の顔には先程の高揚の痕跡など一切残っておらず、いつものふてぶてしい面構えに戻っている。ハアと大きくため息をついてまた顔を伏せた。さすがにそんな態度は気に障ったのだろう、少しだけイラついた空気を纏いだすのを感じた。

「おい、とつとと仕事しろ。こないだ提出期限過ぎて事務に大目玉くらったのはどこのどいつだ。少しは学習したらどうなんだ」

こういう時、匂いのがなければ野上は意外とまともな人間だと思う。性格はあまりよろしくないが、約束事は守るし、常識もにおい以外でなら持ち合わせている。においさえなければなあ、と埒もないことを考えていたら無意識のうちに言葉が転がり落ちていた。

「なあ、見つけたか」

なんの脈絡もないその言葉に慌てたのはむしろ俺の方だった。顔を上げられない。野上はしばらく黙っていたが、俺が沈黙に耐えきれなくなる寸前、まだだよ、とやけに幼い声で答えた。その一言に、そうかとだけ返して、顔を上げないまま立ち上がった。書類を乱雑にまとめ、一度もあいつの顔を見ずに部屋を出た。あからさますぎる自分の反応に舌打ちしたいが、じゃあ今のあいつを真正面から見ることができるのかと言われれば、答えは否だ。どうせどんな顔をしているのかは手に取るように分かるし、見たところで何もできない。あの時と同じひどく危うい泣き笑いをしていただろうあいつにかける言葉など、はなから持っていないのだから。

心の奥底からドロドロとしたものが湧き上がってくる一方で、まだだよという答えにほっとしている自分があるのだからたちが悪い。心のどこかに常に居座る、彼がそれを見つけてしまったらという不安。こんなものがあるから、不意にぼろっと聞いてしまう。これで何度目かも分からない。無意識のうちに聞いて、すぐに逃げ出

して、自己嫌悪の渦に飲み込まれる。そんな己の臆病加減を直視する精神的苦痛を代償に得られるのは僅かな安心だけで、絶対に釣り合っていないと思う。

「ほんと腹立つ」

自分のデスクに戻ってきて思わずこぼれた呟きに、お疲れ様ですと隣から声がかかった。

「また野上さんのところだったんですね？ 眉間の皺、すごいことになってますよ」

苦笑交じりで差し出されたコーヒーを受け取り、礼を言う。さつき適当に詰めた書類を出せば皺が寄っていて、まるで今の自分みたいだなと渴いた笑みが浮かんだ。

月刊缶じょう字祭号 通巻202号
2014年10月31日発行

編集人 張子

印刷所 広島大学 文団BOX